



第 9 号

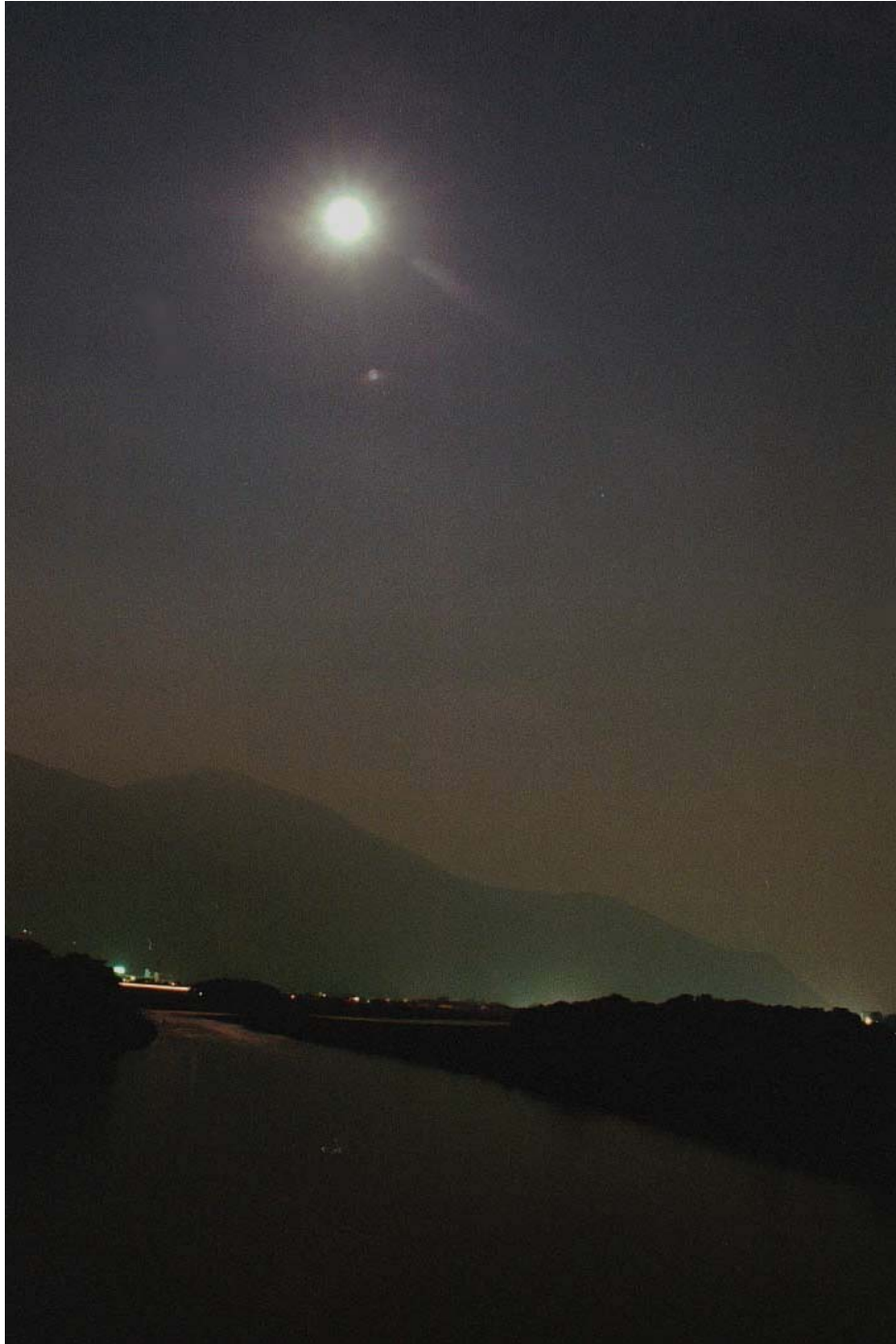
# さらしな の 里

「友の会」だより



2003・秋

矢島岩男さんは千曲市羽尾本田生まれ。六十歳から俳句を始め、  
俳歴十五年。戸倉俳壇会員、会誌「青嵐」。現在は同市若宮在住



縄文の里やあまねく月の影

矢島岩男

撮影・翠川泰弘 9月13日、冠着橋から五里ヶ峰方面

# 童心に帰って清流くだる

千曲市の誕生を前に千曲川流域で八月二十四日、坂城、上山田、戸倉、更埴の一市三町の商工会主催による「第七回千曲川いかだ下りコンテスト」が開かれました。

このコンテストは広域的なふれあいを深め、地域の産業経済観光、文化の発展を目的に平成九年から開催され、関係者のみなさんのご努力により今年で七回を数えることになりました。我々友の会は、いち早く主旨に賛同して第一回から今回まで連続で参加してきました。

今年、多くのみなさんの協力をいただき、また、縄文丸を全面改装して臨んだ甲斐あつて「隠しタイム部門」で三十八チーム中、見事四位と過去最高位となりました。これはまさに予感

## 全面改装、過去最高の4位



と老若男女の団結力の賜物でした。

いかだ下りの楽しさは、童心に帰って大自然に親しむことはもちろんですが、縄文丸の場合は、

工夫をこらした古代人の服装で、みんなで縄文時代にタイムスリップしてしまうところにあります。

また、快晴に恵まれて最後の焼肉パーティのビールの味は格別でした。この楽しさを大勢のみなさんに体験していただきたいと思ひます。

特に、今まで中心的存在だった高島哲夫さん、関尚志さんの元気だったころの姿が懐かしく思ひだされます。今後も縄文丸は、先輩たちの思いと古代ロマンを乗せ、千曲川の清流を下り続けることと思ひます。

（塚田勝寿）

## 生活に取り込んだアフリカの知恵に衝撃

アフリカー思いつくものは、内戦、飢餓、病氣、人類誕生の地、日本からは地球の反対側で遠い遠い国。

しかし、三月二十二日に開催された京都大学人間総合学部教授の福井勝義先生の講演は衝撃的だった。大昔から牛をはじめとする動植物の種（遺伝子）を守り続け、自然と一体化した独自の文化体系を持つボデイ。それを生活に巧みに取り込んでいく豊かな創造性と優れた知恵。

私の塩崎の生家でも数年前まで祖父が牛を飼っていた。幼いころは牛舎で働く祖父たちの傍らで、干草の上で跳ねたり、牛を見ながら遊んでいた記憶がある。



かな生き方なのだと思う。

（荒井晶子）

私は今、大学二年。一年近くアフリカについて学んできたが、学んだことと云えば、貧困、紛争など国際関係に関する非日常的なことばかり。人が生きるうえで何が大切か、彼らの当たり前のように生きる姿は人間本来の心豊

# 炭焼き仲間で「ねずっぽの会」

「ねずっぽの会」とは羽尾・仙石地区の人たち十人ほどでつくる炭焼仲間の愛称です。私は昭和二十七年

(一九五二)、中学を卒業してすぐに東京へ出ましたので、「ねずっぽ」という言葉がいつごろまで使われていたかは定かではありません。ガーデントラクターが普及し始めたころまでではと思います。

農業をやっている家には、いくつもの背負子(しよいこ)があったものです。じやんとやん、あんやん、ねやん、おらんの、おととの。家によっては、かやんのもありました。

ねずっぽとは、背負子に使う杖と思ってください。

立ったまま一息入れたいときは、ちょうど腰の部分にあたる背負子の下の横棒に引つ掛けて体重を支え、背負子を下ろして休むときは、また背負いやすいよう背負子のつかえ棒にして使いました。

現在は軽トラが背負子、荷

車、リヤカーの役目をはたすようになりましたが、そんな昔を懐かしんで、ねずっぽの会という名前をつけたものです。

最近、注目されている木炭について説明します。木炭は活性炭として驚くほどの性能のあ  
るこ  
が検査  
の結果、  
証明さ  
れていま  
す。マイ  
ナスイオ  
ンの発  
生で環  
境浄化  
に有効  
だそう  
です。

多孔

質でその利用方法としては、冷蔵庫の脱臭用としても注目されています。風呂に入れ



仙石にある金井信夫さんの炭窯。善光寺平と飯綱山が見渡せる

ると、さわやかで湯冷めがなく、夜のトイレの回数が減るでしょう。風呂水の汚れを抑え、アトピーや肌荒れを防ぐとも言われています。炭を焼く時、副産物として出る木酢液は無公害の土壌改良材として、また野菜には消毒液としても使えます。

ほかに、炊飯用として十粒位の木炭を二本位水洗いし、水と一緒に炊くと、色艶よく美味しいご飯ができます。米びつに数本入れておけば、虫もつきません。炭は二、三回使用したら水洗いし、乾かして繰り返し使ってください。絶対に洗剤で洗わないでください。床下に敷き詰めると、湿気の多い時は吸湿し、少ない時は排湿します。

私も面白半分炭焼き窯の形さえあれば、簡単に炭ができていいと思います。自己流で窯を作りました。ところが、そう簡単にはできません。とこ

ろが、そう簡単にはありません。とこ  
ろが、そう簡単にはありません。とこ  
ろが、そう簡単にはありません。とこ  
ろが、そう簡単にはありません。とこ  
ろが、そう簡単にはありません。とこ

現在、専門書にもとづいて新しい炭窯を製作中です。(金井信夫)

## 背負子仕事の昔懐かしんで



# おらほの冠着 ⑨

冠着山は江戸時代の初めごろから五加・更級の入会山となっていた。入会とは一定の地域の人々が決まりに従って山林野原から収益を得る権利をいう。

## 束の薪で自慢のねじって生木

冠着山は、昔の羽尾村（仙石も含む）の地域にあるが、旧五加村や須坂村は山がない。農業をするには、肥料にする刈藪、牛馬のエサにする青草が必須であるように、燃料にする薪も山がなければならなかった。領主としては、いずこの地でも生産をあげねばならぬので山のない地の人々にも入会を認めた。

秋になると、夜明けとともに、背負子に弁当箱をつけて群れをなして山を目指した。よいソダを見つけ、丸けて背負い下す。これを雪が積るまで続ける。五加



の人、主に千本柳・内川の人々が御麓の黒滝口から入り、須坂と他の村の人は仙石口から入って稼いでいた。材を束にするには技が必要だ。ギンナラのよいのを外側に並べて、藤ツルでぎゅうぎゅう締め上げる。この方式を卒業すると、今度は生木をねじって締め上げるのだが、この域に達するのは難しいものだった。

束の姿をみて、山仕事の技の良し悪しが分かった。こんな束を家の周りに立て回すのはおか所の五加の人々にとっては何にもましての誇りである。「こんなキレイな焚き物ある家なら、娘くれてもいい

わいな」と親を安心させたという。

煙が多く火持ちの悪い麦わらや桑ツポをかまどで焚いて、女衆を歎かせていたのだから無理もなかった。プロパンが登場して、こんな心配はなくなったが、焚き物を探る技と「ねじつ木」のような芸当が消えてしまった。今、六十歳代以上の人々の栄光の歴史である。

（塚田哲男）

〔編集後記〕 千曲市となって最初の「縄文まつり」に合わせたの発行です。トップページは千曲川を入れてさらしなの里を紹介する内容にしたいと編集委員会では考えました。矢

島岩男さんには翠川さんの写真をお持ちし、今号のために句作していただきました。矢島さんは奥様の園枝さんとともに戸倉町公民館館報の俳句コーナーでの入選者の常連です。月の下部に輝く小さな点は約八十年ぶりに地球に「大接近」した火星です。

今号は奇しくも「ねずつぽ」と「ねじつ木」と、同じ背負子にまつわるお話が並びました。「おらほの冠着」の写真で背負子を支えている杖が「ねずつぽ」です。いかだ下りをリポートしていただいた塚田勝寿さんのお宅の納屋から背負子を引つ張り出し、撮影しました。勝寿さんも昔、この背負子にりんご箱をのせて運んでいたそうです。

（冠男）

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161